20170204神戸新聞

デジタルカメラやスマートフォンなどに使われている「イメージセンサー」に関する発明で、県立大特任教授の寺西信一さん(63)が英国のエリザベス女王工学賞に選ばれたのを受け、寺西さんが所属する同大高度産業科学技術研究所（上郡町光都）が３日、記者会見を開いた。渡邊健夫所長(58)は「長年開発に携わった業績が、世の中に根付いたことが認められた。研究所の教員の奮起につながれば」と、日本人初の快挙をたたえた。

（松本茂祥）

研究いつでも前向き

エリザベス女王工学賞に選出 県立大の寺西さん

所属の高度産業科学技術研究所 渡邊所長らが会見

寺西信一特任教授の快挙を喜ぶ県立大高度産業科学技術研究所の渡邊健夫所長(左)ら＝上郡町光都

イメージセンサーは光をデジタル信号に変換する部品。寺西さんは、光が当たっていないセンサーで発生するノイズを減らす「埋め込みフォトダイオード」を、日本電気に勤めていた1980年に発明。残像をなくし、画像の高画質化に寄与した功績が、今回の受賞につながった。

寺西さんは2013年に同大特任教授に就任した。渡邊所長の研究室で、エックス線自由電子レーザー施設「SACLA(さくら)」(佐用町)向けに、エックス線イメージセンサーの開発に携わる。

姿勢に一目 「できない」とは言わない

渡邊所長は、寺西さんについて「何事にも前向きに取り組む。『できない』とは絶対に言わない」と、研究姿勢に一目置く。

本人は渡米中で、受賞決定後のメールでは「お祝いのメッセージを贈られ、たくさんの人と関わっていることを改めて認識した」と感激した様子だったという。

今後もエックス線イメージセンサーの研究を続けるといい、タンパク質のさらなる詳細な構造解析に不可欠な技術開発を担う。

渡邊所長は「医療への展開が期待される分野。受賞を糧に、センサーの開発を一緒にしっかりやっていきたい」と語った。